

向井万起男

Makio Mukai

君について行こう

女房は宇宙をめざした



向井万起男
Makio Mukai



君に
ついて行こう

女房は宇宙をめざした

●著者紹介

向井万起男（むかいまきお）

1947 年、東京生まれ。

慶應義塾大学医学部卒。医学博士。

現在、慶應義塾大学医学部講師(病理学専攻)

君^{きみ}について行^いこう 女房^{にようぼう}は宇宙^{うちゅう}をめざした

1995年10月15日 第1刷

1996年4月3日 第9刷

著者 ^{むかいまきお}向井万起男

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2丁目12-21 〒112-01

電話

販売部 03-5395-3624

製作部 03-5395-3615

編集 株式会社第一出版センター

代表 大竹勝五郎

東京都新宿区新小川町9-25 日商ビル 〒162

電話 03-3235-3051

印刷所 廣済堂印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

N. D. C. 914 390p 20cm

© Makio Mukai 1995

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは
第一出版センターあてにお願いいたします。

ISBN4-06-207785-X (セ)

君について行こう

——女房は宇宙をめざした——

君について行こう——目次

PART 1

第1章	出会い	9
第2章	宇宙飛行士をめざす	24
第3章	結婚	40
第4章	新婚生活	61
第5章	生い立ち	74
第6章	無念	90
第7章	毛利さん宇宙へ	100
第8章	搭乗決定	108
第9章	家族支援プログラム	115
第10章	乗組員仲間たち	130
第11章	マーク・リー	145
第12章	エルビス・プレスリー	149

第13章	クッキー・セット	157
第14章	配偶者会議	166

PART 2

第1章	宇宙飛行記念品	173
第2章	マスコミ対応訓練	189
第3章	模擬訓練	212
第4章	通い夫	233
第5章	最終舞台稽古	253
第6章	直系家族問題	274
第7章	停電事件	296
第8章	NASA専用機	310
第9章	バーベキュー・パーティー	321
第10章	発射台39A	330
第11章	打ち上げ	348
最終章	夢	371

装幀 中村志保子

〈写真提供・協力〉

宇宙開発事業団

共同通信

NASA

毎日新聞社

ブラウンに捧ぐ

小さな生き物は、じっとしていられずに小刻みに動き続けてしまうことがある。

この現象を、細菌学では「ブラウン運動」という。

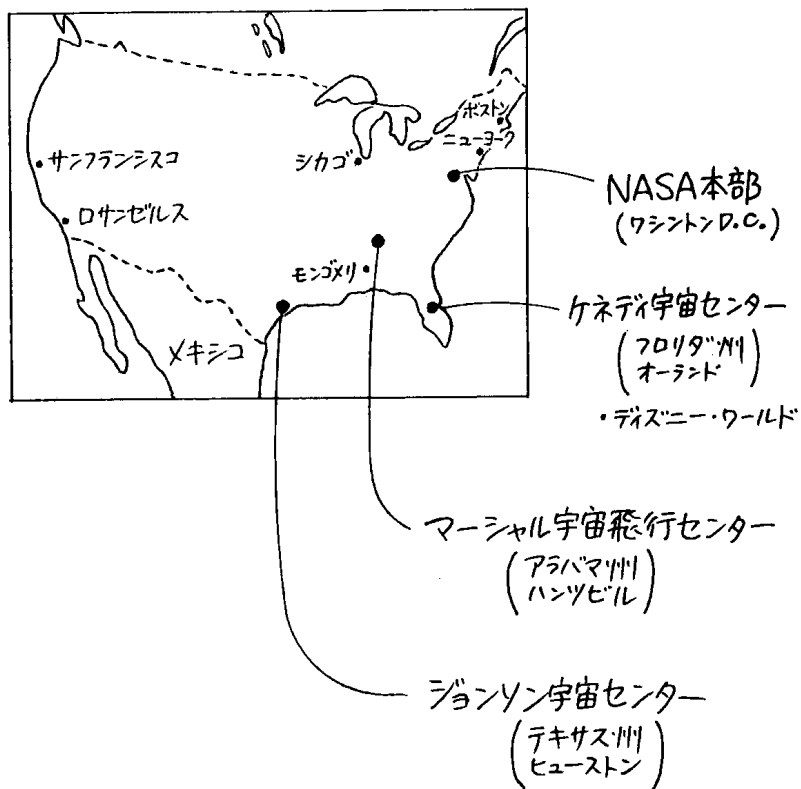
私の女房は、私を置いてきぼりにしてアチコチ飛びまわり続けている。

そんな女房を、私は「ブラウンちゃん」と名づけている。

**P
A
R
T

1**

《NASA フィールドセンター案内》



第1章 出会い

私は自分の女房となる女に初めて会う前から、その名だけは何度も噂話で聞かされていた。

医師国家試験を終えた私が、慶応義塾大学医学部で医師として働き始めたばかりの頃だ。私の5年後輩のアイツは、まだ医学部の2年生だった。

「おい、聞いたことある？　なんか凄く変わった女子学生がいるらしいぜ。やたらとスキーがうまいうえに、酒が恐ろしく強い女らしいんだ。ついこのあいだなんか、スキー部の集まりで酒飲み合戦をして、男子学生が次から次にソイツに挑戦したらしいんだけど、男どもが全員ダウンしてもソイツだけはケロッとしていたっていうぜ」

「その女の名前はなんていうんだい？」

「確か、ナイトウチアキとかいったな」

こうした噂話を耳にするたびに、私はいつも思っていた。〝へえ、とんでもねえ女がオレたちの

医学部にも入ってくるような時代になっちまったわけだ。まあ、機会があったら、その、とんでもねえ女を見てみたいもんだぜ”。

二人は同じ医学部構内にいたのだし、私が内藤千秋^{ちあき}を初めて見るまでたいして時間はかからなかったはずだ。ところが、私の記憶からは、初めて内藤千秋を見た時の記憶がまったく欠落している。たぶん、期待に反してたいした印象を受けなかったのだろう。

しかし、内藤千秋が医学部5年生の時の出来事は鮮明に覚えている。それが女房と私の出会いの記憶ということになる。

私は医師といっても、世間でよく知られている内科や外科といった臨床系の医師ではない。基礎系研究室である病理学教室の医師（病理医）である。私が所属する病理学教室では、慶応病院で亡くなった患者さんのご遺体を解剖することが重要な仕事となっている。病理医が日替わりで解剖当番となり、午前9時から午後8時まで待機し、内科や外科など臨床の医師からの遺体解剖依頼の電話があると、病理学教室の地下の解剖室で解剖を行う。

さて、ある時、病理学教室でアルバイトを募集することになった。午後5時に医師以外の職員が帰ってしまった後、解剖依頼の電話番号、そして、依頼があれば我々病理医が解剖するのを手伝^{もろ}って貰うアルバイトだ。アルバイトを雇うといっても、なにしろ夜遅くまで残ってもらって遺体解剖を手伝って貰うのであるから、普通の人では勤まらない。そこで、医師の卵である慶応医学部の学生たちに呼びかけることになった。そして、ナント、この募集に医学部5年生の内藤千秋が女だてらに応募してきたのだ。

私たち病理学教室の人間は、応募してきた学生たちの中に女子学生が混じっていることを知って驚いた。“ほほーっ、なんと女の子がねえ!”という感想だ。しかし、男子学生に限るといつて募集を

したわけでもないし、今さらお引き取り願うというわけにもいかなければいいか。まあ、やって貰おうじゃないの、というわけだ。何人の医学生が応募してきたか正確な人数は忘れたが、複数の学生（5人から10人程度）が日替わりで一人ずつ午後5時から働くことになった。

という次第で、内藤千秋が時々アルバイト学生として病理学教室にやって来るようになったが、私が解剖当番の日と重なったことがなかったので、私は内藤千秋に手伝って貰って解剖をしたことはなかった。しかし、「やっぱり女じゃ無理だぜ」、というような苦情が教室員からあがってこなかったところを見ると、内藤千秋も男子学生と同じように夜の解剖アルバイトをきちんとこなしていたようだ。（当時病理学教室に勤務していた人間にとつて内藤千秋といえば、女のくせに夜の解剖アルバイトにやって来た剛毅なヤツ、ということで記憶されている。10年後、内藤千秋が宇宙飛行士に選ばれた時、当時のことを思い出して、やっぱりアイツならなあ、ということになるわけである。）

一緒に解剖をするというようなことはなかったが、ある出来事を私たち二人の出会いとして今でも私は鮮明に覚えていて。その出来事を除くと、内藤千秋がアルバイト学生として病理学教室に来ていた当時のことで私が覚えていることなど一つもない。

当時、私のような若い病理医は、解剖当番であろうがなかろうが、毎日夜の9時、10時まで残って仕事をしていた。若い男が夜遅くまで仕事をしているのであるから、当然腹が減ってくる。私は6時頃になると病院の近くの店に出前の注文をすることが多かった。

ある日のことだ。腹が減った私は、自分の仕事部屋を出て、電話がある病理学教室の事務室に出向いた。勝手知ったる部屋だ、まっすぐ電話の前に行くこと受話器を取った。

「武蔵屋さん？ 慶応の病理学教室の向井だけど、ざるそば一丁お願い！」と言いながら何気なく顔を上げた私は、すぐそばの机の前に座って電話番号をしている内藤千秋に気がついた。私を見ながら笑

っているのだ。私は、なんだ!?」と思った。二人の目が合うと、内藤千秋は下を向いたが、それでも俯いたままクスクス笑い続けている。私は呆氣にとられた。この女は何がそんなにおかしくて笑っているやがるんだろう。このオレがそんなにおかしいのかよ。まったく、変な女だぜ。電話を切った私は、俯いてクスクス笑っている内藤千秋を見ていた。しばらくして内藤千秋が顔を上げたので、私は顔を突き出し、にらめっこをするように目を大きく剥いて睨みつけてやった。すると、内藤千秋は今度ばかりでもないで私を見ながら、まるで子供のようない屈託のない明るい笑顔を見せながら笑い出した。いい加減ばかしくなった私は、そういえばオレはこんな所でにらめっこをしていられるほど暇じゃねえんだっけ、と気づいて事務室を出た。自分の仕事部屋に戻りながら、私は変てこりんな内藤千秋のことを考えていた。「まったく……、ひとのことを笑いやがって、変な女だぜ。でも、まあ、不思議に怒る気はしなかったなあ。そ、考えようによっちゃ、あれだけ屈託のない笑顔で悪くはないからな」。

ばかばかしい話だが、これが女房と私の出会いだ。そして、この時以来、どんなに周囲の人間が内藤千秋のことを大酒飲みで男勝りで剛毅な女と言っても、私は、まるで子供のような屈託のない明るい笑顔を見せながら笑ってばかりいる変な女とは思わなくなった。

それから約2年間、私と内藤千秋の間には、何の接触もなかったと思う。その間、内藤千秋が医学生スキー大会で女子チャンピオンになったというようなことを聞いても、私は、ホントかよ、あのニコニコ笑ってばかりいる変な女が本当にそんなことをしているのかよ、信じられねえなあ、と思っていた。そして、内藤千秋が医学部を卒業して慶応病院の外科学教室に入局したことを知らされた時も（内藤千秋が外科医になったということは、くちコミ情報ですぐに私に伝わってきた。それまで慶応医学部を卒業した女性で外科医になった女性は一人もいなかった）、ちよつとしたニュースだっ

たのだ、あの笑ってばかりいる変な女が外科医だなんて何かの間違いじゃねえのか、と黙っていた。

ところで、当時の私は知らなかったが、内藤千秋の学生時代には外科学教室にまつわる一つのエピソードがある。病理学教室の解剖アルバイトをしていた頃よりも後のことだ。内藤千秋は外科学の期末試験で肝臓外科部門だけ落第点を取ってしまった。しばらく後に追試を受けなければならない。べつに、内藤千秋だけがヒドク出来が悪かったわけではない。この肝臓外科部門を担当する先生は、しばしば半数以上の学生に最初の試験では落第点をつけるのだ。時には、ほとんどの学生が落第点をつけられるということもある。そして、追試ではほとんどの学生が合格点を取れるのだ。これは、みんなが知っていることだ。というわけで、肝臓外科部門で落第点を取ったからといって、学生たちもたいてい慌て^{あわ}たり、騒いだりしない。ところが、内藤千秋のヤツは騒いだのだ。内藤千秋は、この肝臓外科部門担当の先生の部屋に乗り込んで、直談判に及んだのだ。

「先生、なんで私に落第点をつけるんですか。確かに私は先生の授業はサボって出席してません。でも、出席していた同級生からノートを借りて勉強して、試験ではそのノートのとおり答案を書いたんですよ。なんで、それで落第点になるんですか。おかしいじゃないですか」

そして、続けて最も大切な本音を吐く。

「先生の追試が行われる時、ちょうどスキー部の合宿があるんです。大事な合宿なんですよ。追試なんか受けてる場合じゃないんです。なんとかなりませんか」

こんなことを直訴する内藤千秋も凄い^{すごい}が、こんなとんでもない直訴を聞いた肝臓外科部門担当の先生がちっとも怒らなかつたというのは、もつと凄い。肝臓外科部門担当の先生が、内藤千秋を諭^{さと}して言う。

「内藤君、世の中は思い通りにならないことばかりなんだよ。私だって、どう見ても素晴らしい出来だと自信がある論文をアメリカの一流の医学雑誌に投稿しても、掲載を断られることがあるんだから。内藤君もこんなことくらいで気落ちしないで、がんばらなくっちゃいけないね」

内藤千秋は自分の答案と先生の論文とといったどういう関係があるんだろう、なんだかよくわからないなあ、と思ったが、妙な肩透かしをくったように拍子抜けしてしまい、ポーツしながら部屋を出た。そして、しかたなく、スキー場で行われていた合宿から追試を受けるために東京に戻り、追試が終わると、とんぼがえりで合宿に戻った。

ところで、これには後日談がある。卒業後に外科学教室の入局を希望する学生たちを一応チェックするために、外科学教室の主任教授による面接が行われた時のことだ。自分の番が来た内藤千秋は、主任教授の前に出た。内藤千秋を見た主任教授が開口一番言った。

「ああ、あなたが、あの、落第点を取っておきながら文句を言いにとなりこんで来た内藤君ですか」

内藤千秋は、ドキッとして、こりやまずいな、入局を断られたらどうしよう、と不安になった。笑いでごまかそうとしたが、顔が少しひきつってしまった。主任教授は内藤千秋を見ながら楽しそうに笑うと、続けて言った。

「まあ、頑張^{がんば}ってください」

こうして、内藤千秋は寛大にも外科学教室の入局を許されたのだ。

内藤千秋とにらめっこをしてから約2年後、私は初めて内藤千秋に声をかけたという記憶がある。外科の症例検討会議に私が呼ばれた時のことだ。私のような病理医は、手術で摘出された患者さんの組織を顕微鏡で観察して診断するという仕事もしているので、しばしば臨床の医師たちの会議に呼ば